

文学を通して得られる人生の報酬

講師 保坂和志氏

●考えることの大切さ

今日のテーマは「文学を通して得られる人生の報酬」ですが、つまり人生はお金じゃないという話です。大きく分けて3つぐらいの話しをしようと思います。

まずは、僕の女性の知り合いの話です。彼女は、紆余曲折した人生を送ってきた人です。高校卒業後、すぐに大学には行かずに海外へ行き、帰国後はパソコン教室の先生になっていたのですが、いろいろと悩む人生を送っていました。

そして彼女は帰国後に大学へ入り直したのですが、そこで年下のある女性と友人になりました。ここでは仮に「エリカちゃん」としましょうか。エリカちゃんは普通に商社マンと結婚して普通の家庭をもったのですが、その姿を見て私の知り合いの女性は「私もエリカちゃんみたいに普通の人生を生きられればラクなのになぁ」と言うのです。でも僕から見たら、彼女の方が人間味があって、ずっと魅力的な女性なのですが。

一般的にはエリカちゃんみたいに普通に結婚して、普通に家庭を維持してというのが安定した人生、幸せだと思われているけれど、僕は果たして本当にそうなのか、と言いたいです。

そして今日の僕の話はわかりにくい部分もあるかもしれないけれど、わかりやすい話というのは明日には忘れてしまうものです。わかりにくい話はそこだけは覚えているということです。エリカちゃんのような人なら、よくわからないことを素通りしちゃうかもしれません。それでも本人は幸せなのかもしれません。「わからないことをいろいろ考えても仕方ない」というふうに。

ここで大事なことは「考える」ということです。「考えずに生きて行くことが本当にラクなのか」ということと、果たしてそれが本当にできるのか、ということです。

H.J. ウェルズ（ハーバート・ジョージ・ウェルズ）という作家の「タイム・マシン」というSF小説があります。ストーリーは80万年後の世界で、そこには天使のような無垢な子どものような人たちがかりがいて地球が楽園のようになっています。しかし、そのうちに何か変だなと感じることが起こります。その無垢な子どものような人たちが、物陰を怖れ、夜になると何かをすごく怖がってどこかに避難してしまう。というのは、夜になるともう一つの進化した人類が現れて、無垢な人たちを捕まえて食べてしまうからです。一見地上の楽園に思えた世界は、実はまったく逆の恐ろしい世界だったと、そういう話です。

僕はこれを結構リアルな想像であり、現代に通じているのではないかと思うのです。

19世紀以降、近代の産業やさまざまな工業製品が進めてきたことは、生活の苦勞を取り払うことでした。いちいち川まで水を汲みにいかなくてもいいように水道を引いたり、手で洗わなくてもよいように洗濯機を作ったりして生活をラクにしてきました。しかし、社会をどんどん便利にラクにした結果、人間力がどんどん弱くなったと思うのです。僕なんかもそうですが、もうすでにだらしく、なさけなく“させられちゃって”いるのです。何もかも自分の力で獲得するということができなくなっています。例えば、雇止めや非正規雇用などの社会問題によって、現代人は多くのストレスを抱えて苦しんでいるといわれます。しかし本当に大変なら田舎に行って農業をすればいいのでは。「でも農業は朝早くから一日中の肉体労働で大変」とか、すぐに「それはできない」と思うかもしれないけれど、それも何かに思い込まされているだけのこと。実はそっちの方がラクなのです。体力的にはキツイかもしれませんが、心のストレスがないのですから。

だから比喩的に考えると、都会の中で飲食店とか工場とかで「非正規雇用でも働くしかない」というふうに脆弱な気持ちになってしまっている、思い込まされていると言えます。

だから僕は今の社会が、「タイム・マシン」の小説にあるように、食用にされていても何も考えない人間、ただひたすら危機やパニックが起きた時を怖れて続けている人間で構成されているように見えるのです。

●自分の尺度をもつ意義

次に、エリカちゃんとは違う、もう一方のいろいろと苦労している女性の話をしましょう。

僕は人生を生きるというのは、やはりステージを上げるためにあるものだと思います。そのステージというのは、人が与えるものではなく、自分の中で次の段階、次の段階と積み上げていくものです。

例えば野球でもサッカーでも、勝ったか負けたかということがわかるだけでも楽しいけれど、次の段階になって、ゴールが見事だったとかキーパーがすごかったというような内容がわかるようになると、勝ち負けしか見ない人よりも1つ上の見方になる。そしてより細かく試合の内容に目を配るようになれば、さらに上の段階に行けるわけです。

そうすると勝ち負けにしか関心のない人は、そういう細かい面白さに気付くことができない。詳しく見る人は、ただの勝ち負け以上に面白さがわかる。これは別にスポーツの観戦に限ったことではないのです。

料理でもそうです。ウチの近所に美味しい中華料理の店があって女房とよく行くのですが、彼女は「どうしたらこんなふうに肉が軟らかくなるんだろう」とか「柔らかいけど形が崩れていないのはなぜだろう」とか言う。僕は料理をしないから、ただ「旨い」と言うだけ。それだけ家内の方が料理に関してはステージが上なわけです。

友人に「ウチの女房は豆腐が好きで、300円とか500円とかすごいのを買ってくるんだけど、僕は一丁50円の豆腐との味の違いがわからないんだよ」と言う人がいる。これはやはり味の違いがわかる方がそれだけ人生が豊かで深いのです。

入り口に立っているだけでもそれなりに面白いと感じることはできるのだけれど、奥へ奥へと行けばいくほど、いわゆる風景が違って見えてくる。

ですから「エリカちゃんみたいに生きられたらラクだなあ」と言った彼女は、エリカちゃんよりもっと複雑な風景を見ているから、彼女の人生というのはとても豊かなのです。

ただし、そこでなぜ彼女の方が悩んでしまうのかということ、自分の人生を自分の尺度で見る、自分の言葉で自分の生きてきたことを語るということをしていないからです。

こうしたことは学校教育では教えません。成績がいいとか、運動ができるとか、外からの比較でしか評価しません。勉強で20番だったのが10番以内に入って「努力したね」と評価されても、そういうのは全部、外からの評価でしかありません。

人の目や人の尺度で見るのではなく「自分で自分の尺度を作れ」ということなのです。

とにかく、自分がどう生きて行きたいとか、どういう毎日を過ごしたいかという、それが先にあるべきで、とにかく評価とか、人と比べてどうだとか、勝った負けたとか、ココまでやったから偉かったとか、そういうことでは人生が一度も自分のものにならないのです。

●文学や芸術における価値観

最後は、創作に関係した話です。

僕が文章を書いた「チャーちゃん」という絵本ですが、絵を描いたのは小沢さかえさんという方です。

実はこの絵本、僕が文章を渡してから、さかえさんの絵が仕上がってくるまでに3年もかかったのです。だから当時僕は途中で「これは出版には至らないだろうな」と思っていました。何かの理由があって小沢さんが投げ出しちゃったんだろうなと。

ちなみに僕がその文章を仕上げたのは20分か30分でした。ただし、文章ができあがるまでは10年かかっています。

チャーちゃんというのは、僕が飼っていた猫の名前ですが、死んで4年ぐらい経っても、当時の僕はどこか悲しみを引きずっていました。そんな時に、キース・ヘリングという人の描いた犬や猫が踊っているイラスト集を見て、「あっ、チャーちゃんが踊っている！」と思い『死んでもチャーちゃんは踊っている』という絵本を作りたいと思いついたのです。ただそうは言っても、具体的な言葉はなにも出なくて、ようやく10年後ぐらいに、あるひと言が浮かんだのです。「僕、チャーちゃん。今踊っています」のひと言。でもそれ以外は何も出なかった。そして十年後によくアイデアが具体化して、最後は20～30分で書き上げた、そういういきさつです。

ところが出版後に小沢さんに聞いたら「投げ出したなんてとんでもない！3年間ずっとやっていたんですよ」と言われました。つまり小沢さんは20枚ぐらいの絵に3年間の時間をかけたわけですね。これは世間で通用する時間のモノサシとは違うものですね。

さて、もう1つの話。

僕には20歳も歳の離れた80歳のいとこがいますが、若い時に画家になりたいと思い、何度か浪人して東京芸大に入ったのです。

そしてもう一人の息子が稼業であるお菓子屋を継いだのですが、彼は、家族も呆れるほどお金の話しかしないのです。財産は1億だか2億だかあって生活に困っているわけではないのですが、とにかくお金の話ばかりなのです。

例えば、彼は数年前に車で単独事故を起こしたのですが、骨折して入院しても「保険のおかげで300万円儲かった」と誇らしげに言っていました。すでに財産が1億円あるのに、300万円なんてその3%です。それでもお金が入って嬉しいという気持ち。何のために1億円持っているんだかわかりませんよね。

お金というのは、まったく自分の外にあるものなのですが、不思議なことに、人の気持ちをとてもむしばむものです。そのいとこはたまに電話で話したりもするけれど、いつもお金の話ばかりで、あまり面白くない。

一方、絵描きの方のいとこと会うと、やっぱりこっちの話の方が格段に面白い。人間は、生涯を通じた関心の置き場所の違いでこんなに差がでるのかと再認識しました。

文学でも芸術全般でも、自分がその場では簡単に理解できないものに出会うというのは大事です。すべてがその場で説明できるようなものでなくとも「あの一言はなんなのだろう」などと考え、自分の尺度で読み込んでいくことが非常に大切なのです。自分のわからないことを言う人、やる人、存在自体がよくわからないという人に出会うことは、深く考えるきっかけになるという意味で、とても大切なことです。

とにかく「なぜ？」と考えることが、とても重要です。そこでそれを見ないでスルーするか、それをすぐに会得できるか、何年も心にとどめておくかというのが、文学や芸術に出会うということなのです。

〈質疑応答〉

〔質問〕

今日のお話しは、人から見られる評価で自分を判断してはならないという内容だったと思いますが、そうした中で保坂さんにとって文学賞というのはどういうものと捉えているのでしょうか。

〔保坂氏〕

まず、若い頃の文学賞はそれがないと注目しない人がいるから、しょうがない。受賞しなくてもいい

のだけど、何とか賞を受賞という、少しは注目する人がいたり本が売れたりするので、僕も文章を書いてその収入でやって行かないとならないから、というのがひとつ。

もうひとつは、これもちょっと内面的な問題なのですが、自分がやっていることが、自分の中では間違っていないと思っけていても、自分だけがそう思っている可能性も否定できないのです。だから1回ぐらいは賞をもらうことで少しは自信になる。

ただ僕には小島信夫という大先輩と、もうひとり信頼する同級生がいて、そのふたりが僕の道しるべでしたから、文学賞の受賞よりも、この二人がどう読んでどう感想を述べてくれるかの方が大事です。ただ世間では、文学賞をひとつかふたつとっていたほうが、いろいろと通りがいい。紹介してくれる際などに、わかりやすいという意味で。

【質問】

保坂さんは、文学の翻訳に関してどう思われますか。

【保坂氏】

僕は外国語が全然読めないの、翻訳があることはまずありがたい。

ただひとつだけ困っていることもあります。英語圏にイーヴリン・ウォーという作家がいるの、彼の小説を一番多く訳したのが吉田健一という人。彼の訳したイーヴリン・ウォーの文章にはすごくクセがあって面白いの、他の人が訳したものは物足りなくて、他のどの翻訳も面白く思えなくて困っています。

あとカフカの翻訳でいうと、90年代に池内紀（おさむ）という人がカフカの全作品を翻訳したのですが、彼の翻訳はそれ以前のものよりも、ずっとわかりやすいのです。しかしそれまでカフカを原文で読んでいる人にとっては、やはりカフカの書いている文章とは違うと感じると思います。

それと同じことが、何年前かにベストセラーになった亀山郁夫訳のドストエフスキーの「カラマゾフの兄弟」にも言えます。面白いようにスルスルと読めるのです。

なぜかという、他の翻訳者の本は、今まで書かれていたことを引きずりながら書いているのです。一般的に、ドストエフスキーのセンテンスというのはかなり情報量が多いので読むのが重い。それが亀山氏のドストエフスキーだけは、いろいろと書き連ねられているものがなくてスルスル読めるのですが、僕はこれは違うんじゃないかと思っけています。

【質問】

書いたり読んだり、言葉を豊かにして行くために、子どもたちにしておいてほしいことはありますか。小学生とか、受験の国語の中ではないものなど。

【保坂氏】

まず僕は小学校入る半年前まで時は読めなかつた。だから絵本も絵を見るだけでした。文字というのは思考が豊かになる部分もあるけれど、逆に文字によって思考が限定される部分もある。ある幼稚園の園長先生が言っていました、字を読める子は字を読んでいるが、字が読めない子は絵本全体を見ていろんな発見をしている。だから字が読めることが必ずしも良いことかどうかはよくわからない、と。

それから小学生ぐらいからよく本を読む子もいますが、本を読んでいるということは体が止まっているということでしょう。走りながらとか、木登りしながら本は読めないの、子どもとしては他にもやるべきことがたくさんあるのではないかとも思っけています。実際、僕のように中学校の途中から字だけの本を読むようになって、一生本は読むようになるわけですから。

もうひとつ、小学生の時にとっても社会性が高く思っけていたりあると思っけていた子どもが、大人になって意外にひどいやつになって、中学までひどいことばかり考えて人の殺し方なんか考えていたヤツが、大人になって人に対する思っけてやりの深い人になった例が結構あります。なぜかという、中学までまっ

たく人間味がなかった

子どもというのは、全部自分で考えていくのですね。社会のルールとか良い悪いとかをすぐに受け容れないで、全部自分で組み立てていく。なので社会的な良い悪いがなかなか出てこない。でもそこで自分と同じように、他人にも悲しいという気持ちがあったり痛みがあることを中学ぐらいからずっと考えていきます。

一方、思いやりがあるとか道徳的と思われていた子どもは、言葉を覚えたり挨拶するような外側からの感覚で「可哀想な人には手をさしのべましょう」というような一般的な社会の規範を受け容れていくから、あるとき自分が生きる世界が別になったとき、たとえば金融業などに就職したときに、お金を返せない人は首でもくくってもらうしかないとか、生命保険があったらそれで払ってもらうしかないとか、そっち側の理屈になってしまう。だから子ども時代というのは、うーん、何をしたいかわかんないですね（笑）。

[質問]

論理的な正しさみたいなものに、今みんなとても難儀している。自分が正しいと解っているのに、論理的にひっくり返せないから苦しいなど。保坂さんのエッセイに「論理」についての話があったので、そうしたことをお聞きしたい。

[保坂氏]

論理的に正しいことは簡単に言えるのだけれど、それが本当に正しいかどうかはわかりません。

「あなたの論理に私は勝てないけれど、だからといってあなたが正しいわけではない」ということです。それだけをみんなが共通理解すれば、論理なんて関係ないのです。論理的に何かを構築するということは他を切り捨てていくことだから、部分的に正しいだけだと思います。

よい例かどうかわかりませんが、医学は20年単位ぐらいで常識が変わっていますね。今まで「こうしろ」といわれてきたことが「してはいけない」になってきています。たとえば膀胱炎というのは、今までは水をたくさん飲むべきだったけれど、それはむしろ悪化させるという意見もあるそうです。一見論理的でつじつまが合っている、どちらが良いのかわかりません。ただ医学においては、治せるか治せないかという一線がハッキリしているから、逆に論理だけで閉じないというところはある。

大体、来年の経済どうなるのか、エコノミー予測とかの話になると、まったく逆のことを言う人がいますよね。

[質問]

自分の尺度で考えようとしても、社会生活の中では集団のルール等によって摩擦を受けます。そうすると生計を立てていくためなど、摩擦を避けるために自分が変わって行かなくちゃならないということが起こると思うのですが、どういうふうに妥協したらよいのでしょうか。

[保坂氏]

あの、すみません。僕はそういう部分は余り考えずに生きてきたから、答えられないのです…。

[質問]

芸術と現実の融合はどういうふうに考えたらよいのでしょうか？

[保坂氏]

それは芸術を本当にやる人は気にしていません。そういう社会との接点や自分の需要と供給みたいなことを考えるのは、アーティストではなく商業デザイナー等ではないでしょうか。

お金や時間に現実的な接点をもとうとすればするほど、アーティストとしては不幸になってしまうものです。我が道を行ける人の方が幸せなのです。

何しろアーティストとか文学者とか、創作する人として生きるということは、「金は二の次」と思ったところから始まるわけだし、社会でどう評価されるかということにいちいち惑わされていたら、面倒臭くて芸術や文学なんてできないというのが基本です。

【質問】

でも芸術をやりたいなどと親に言えば、やめなさいとか言われるし、どこかで現実とのバランスを取らないといけない気がするのです。ちゃんと生計を立てないといけないかなとか。

【保坂氏】

アーティストが評価されないとしたら、現実離れしているからではなくて、現実離れしているのではないだろうかという、自身のさもしい気持ちがあるから評価されないのです。やる気があるのならやればいいだけです。もしあなたが何かを作るとか書くとかをしたいのだとしたら、僕のアドバイスとしては「そんなこと言ってるからダメなんだ」となる。そこを本当に信じられるかどうかです。

「そこまで飛ぶんだよ」という場面で「無理ですよ」と言うかどうか。そこまで飛んだヤツしかやっていないんだよ、ある日飛べるんだから、ということです。

それから、さっきの絵本の話で言い忘れたのですが、僕の知り合いの小説家で、いまひとつの人がいるのですが、彼の何がいけないかというところ「ここで考える」という時に、しっかり長い時間考えられないという点です。絵本の「チャーちゃん」の絵を描いた人が3年をかけたように、そういう時間の使い方ができない。

彼の未発表の小説を僕が読んで、「縁側でスイカを食べるシーンだけど、これはないだろう」と言うと「はいわかりました、じゃあこうします」とすぐに代案が出てきてしまう。そうではなくて「いつまでも考えられる」こと、何日とかではなく、何ヶ月単位ぐらいでキチンと考えるということは非常に大事なことです。

【質問】

「チャーちゃん」のときに何年か構想があって、そこからひと息に書き出せたというお話がありましたが、そういう場合に保坂さんは最初にビジョン（絵）が出てくることが多いのでしょうか、文章からでしょうか。

【保坂氏】

最後の段階は文章ですね。ただそこに至るまではいろいろあります。

「未明の闘争」という小説の時にはビジョンが先かもしれません。冒頭のシーンに近いものを夢で見て、それをずっと忘れなかったから「あの夢で始まるようなものを書こうかな」というのがきっかけでした。あのビジョンは特殊で、まったく関係ない場所に石が1個だけ序盤戦で置かれて、その石が気になって仕方ないのだけど、その石を気にするのをどう振り切るかというのが課題の抽象的な小説なんです。

「プレーンソング」が僕のデビュー作ですが、あのイメージは変な人が現れて自分のことをずっとあーでもないこうでもないとしやべっていくというイメージ。コーラン（イスラムの聖典）鐘樓のレコードを持っているのですが、そんなイメージでした。

【質問】

私の中にも「エリカちゃん」がいるなと思いました。でも人はどうしても他人の承認が欲しいなというところがあると思いますが、保坂さんは自分だけの尺度や視点を持つことと、他人の承認を得ることのどこによりどこを置いているのですか。

【保坂氏】

僕自身は子どもの頃から勝手な子どもだったから、人の評価よりも自分の尺度の方が強かったですね。

そして、人の評価を気にしている自分が大嫌いでした。「ああ、いまオレ卑怯なことやっているな、ダメだ」という感覚があったのです。とにかく自分で自分を変えろとか、人からの承認を得るために自覚を持つというのは、僕には無理。

この間ウチの家内が「眠れない、眠れない」と言うのだけれど、実際は寝ているんですよね。眠っているときは意識がないから自分では気付かないだけ。目が覚めた瞬間に、よく眠れたとか眠りた足りないとか思うけれど、それは眠り自体の意識じゃないから、眠りの認識が薄い人はいるだろうと思いました。目が覚めた瞬間にどこまで眠ったかを実感できる人とそうでない人がいる。だから、眠っている自覚がないから眠れないと言っているのではないのでしょうか。それほど自覚って難しい。

そして、自分の尺度をもつために末字事があるとしたら、「今自分は人の目を気にしているかどうか」という意識を常に持ち続けていることです。「あ、また自分は人の目を気にしちゃった、イカン、イカン」と心掛けていると、毎日毎日の積み重ねの中で、人生にだいぶ差がでると思います。

(了)